

「花火」 あらすじ

ある日、太陽は仕事をすっぱかしたみたいに昇らなくなり、それから時々自然の摂理を忘れて昇らないことが何度かあった。

いつしか太陽は昇らなくなり、街は夜に包まれた。

人々は月の憧憬に太陽の残滓を見出し、月光の下に生活を改めた。

月が出ている間は電灯を煌々と焚いて擬似的な昼を作り出し、太陽のない昼間は真なる闇を夜と見做した。

快眠を妨げる朝の喧騒が憎かった夜型の私にとっては、これは非常に都合なことだった。

そんな夜、私は遠くから聞こえる花火の音で目を覚ます。

花火は普通、人々が活動する昼に実施されるべき賑やかであり、誰もが寝静まる夜にこじんまりと上げるものではない。

すっかり眠ることを諦めてしまった瞼を擦りながら窓を開けると、時折、遠い海辺に眩い光が閃いて、まるで忘れ去られた昼の白日を彷彿とさせるようだった。

こんな時間に花火を上げるとなると大々的な広告や宣伝がありそうなものだが、ローカル広報誌の制作会社でバイトをする私が知らないのも実に可笑しな話。

しかし、何かしらに懐かしさを覚えた私は、その催しがすぐに終わらないことを祈りながら、自転車のスタンドを蹴り上げる。

誌面のネタになれば、などと軽い気持ちで。

花火の打ち上げ地点まで、重いペダルに足をかける。

近づくにつれ花火は轟音を轟かせ、稲妻のように波の輪郭を明るく模^{かたど}沿る。

そこで、私は一人の少女と出会った。

少女は記憶を失っていて、言葉すら話せないようだった。

生活力も希薄で、かろうじて白いワンピースを着て自力で立っている以外は赤ん坊と同じだと言ってもいい。だからこそ、その容姿とのギャップに酷い違和感を覚えた。当然ながら行く宛てもないわけで、放っておいたらここで野垂れ死ぬ……と思ったら、後ろをトボトボと歩いてついてくるではないか。

取り敢えず警察に預けて帰ろうかと一人安牌を打ったところ、ちょうどよく警察車両数台とすれ違った。

その台数の多さに不信感が募るも、考えれば瞭然だ。

誰かが、許可も無しに花火を上げたのだから。

これでは、警察に突き出したら共謀罪で逮捕は免れない。どころか、言葉を話せず記憶もないのだから、全責任を取らされるのは自分になる。

ということ、致し方なく少女を預かることにしたのだ。

どうせすぐに保護者が見つかるだろう――。

それまでの短い間、辛抱すればいいだけだ――。

などと樂觀しながら、月光に明らみ始める街を歩いて帰る。

名前を聞いても言葉を理解してくれないが、呼称がないと色々と不便だと、私は少

女の仮名を「花火」とした。

そして、花火の記憶を取り戻す日々が始まった。

少女というよりは赤ん坊を育てているような感覚に、当たり前ながら戸惑い、苛立つこともあった。

夜泣きするし、朝は空腹で騒ぐし、初めはトイレすらも一人でできなかった。まるで苦手だった朝が、私の元だけに帰ってきたようだった。

けれど、辛い日々ばかりでもなかった。

教えたことはちゃんと覚えてくれるし、失敗して泣いてしまう罪悪感も持っている。本を読んでいる時は静かだし、無邪気に笑って出迎えてくれるのはやっぱり嬉しい。人の気も知らないで、「だいすき」と覚えてたの言葉を連ねてみたりするのも、憎らしくも愛らしい。

いつしか、生活は花火を中心としたものになっていった。

それから一年余りが経とうというある日のこと。

町全体が一つの話題で持ち切りになっていた。
それも当然のこと。

こんなもの、誰しも、気付く。

きつと、忘れていたわけではないのだ。いや、忘れられるわけがない。これほどの存在を。

否が応でも、見上げてしまう。

右手を庇にして望む、その尊顔を――。

それから、太陽は職務を思い出したかのように、時々顔を出すようになった。それ
もきちんと、月と反対の時間で。

町は太陽を考慮した生活リズムを再構築しようと躍起になっていた。

それでも、前ほどは嫌ではなかった。むしろ、嬉しい。

花火を遊びにつれて行きたかったし。

意気揚々と帰宅すると、花火が倒れていた。

一瞬、病院に行くことを躊躇したが、背に腹は代えられないと、花火を背負って近くの病院に駆け込んだ。

原因はわからなかったが、点滴でとりあえず具合は良くなったらしい。花火は「ごめんなさい」とひたすらに謝っていたが、それは私のセリフだ。

これからずっと一緒にいる。

そう決意を改め、帰宅したのだった。

二人の家に。

しかし、それからも花火は何度も体調を崩し、ついには起き上がれない程までに衰弱した。

太陽は忘れずに一日の半分を輝いているのに、どこにも遊びにつれて行ってやれない。不思議と顔色は良いのに、お喋りしたいだろうに、我慢させてしまっている。

そんな罪悪感が募ってゆく。

また太陽が嫌いになりそうだ。

そんなある日の夜——つまり、本来の夜。

一層体調を悪くする花火が言った。

「あの場所で、一緒に花火がしたい」

嫌な予感ばかりが脳裏を過ぎるが、それが花火の頼みなら叶えてあげたいと、二人で花火をするための準備をした。

そういえば、花火は夏にするものだからとはぐらかしてきた。

あの時から一年が経って、季節はまた夏。

出会った時とは打って変わって、小さな小さな線香花火。

名前の元になった「花火」とは大分違うけれど。

その小さな火が、一晩中輝き続けることはない。

束ねても重ねても、火を注いでも、最後は息の仕方を忘れるみたいに、ただ白く固まって落ちてゆくだけ。

それでも。

少なくとも、朝日が昇るまでは——。

この仄かな灯りが、影を落とすまでは――。